

ホタルを放遊・飼育し次世代に 引き継いでいく水害の伝承

長崎県伊良林小学校ホタルの会 秋島 康子



1 はじめに

1982年7月23日に長崎県で死者・行方不明者299名の被害者を出した未曾有の「長崎大水害」が起きました。観測史上最大の1時間で187mmを記録し、土石流や山崩れが長崎県に多発し、長崎市中心やや東部の伊良林小学校区でも奥山や鳴滝で多くの家屋が埋没、流されたりし、児童3名、保護者7名が亡くなりました。伊良林小学校の校区を流れる中島川も氾濫し、下流のめがね橋など石橋群も破損・流れたりし、長崎市中心部は甚大な被害をこうむりました。

2 伊良林小学校ホタルの会の概要、取組の特徴(きっかけ、狙い、工夫、苦勞)

水害直後、児童・教職員・保護者たちはとても悲しく、慰霊のために何ができ

るのだろうか悩んでいた時「そうだ、亡くなった方々のために蛍を飛ばそう」と誰かが言ったそうです。そして翌年伊良林小学校ホタルの会は設立され、ホタル放遊会が始まりホタルを飛ばし卵から孵ったホタルの幼虫を育て川に放流する活動を行うようになりました。

会員は保護者、保護者OB、地域住民の有志で構成され、放遊会だけでなく、川掃除などの環境活動も年に数回行い、水害の記憶を次代に引き継ぐ活動を続け今年で35年になります。

校区内には蛍茶屋という地名があり昔はホタルが自然に飛び交っていた地域でもありました。水害後は大規模に河川工事がなされ、とてもホタルが育つ環境ではなくなってしまいました。放遊会はホタル飛翔の時期に学校体育館で行います。犠牲となった方々の御霊が安からんこと



ホタルを放遊する様子

を願い、環境や生命についても考え、水害について語り継いでいます。

今は水害を知らない保護者や教職員も増えてきました。児童だけでなく、出席者全員に長崎大水害のニュース画像を見ていただき水害について理解を深め、また体験者の話を通じて水害の脅威を伝えていきます。

会は黙とう後、画像・体験談を視聴し、主催者の挨拶後ホタル委員（学校でホタルを飼育する係の5・6年生で今年は17名）によるホタルの一生・生態についての簡単なクイズを行います。ユニークなクイズで場内が和んだ後、外に出てホタル（前日校区内の御手水川で採集してきたホタル）を飛ばします。今年も6月2日に放遊会を行いました。400名の参加がありました。ホタル委員は地域住民の参加も呼び掛けるためポスターを作成、各自治会の掲示板に貼ってもらっています。



水害について学ぶ児童

おかげで地域からもたくさん出席していただきました。ホタル委員や担当教職員は異動などで年々変わっていきます。会の執行部は少数ですが、毎年活動がスムーズにいくよう、ホタルについて一から説明・指導し人を育てています。

会の発起人である富工妙子氏は長年活

動に心血を注ぎ伊良林小学校だけでなく長崎ホタルの会も設立され、長崎各地でホタルが飛ぶように尽力されました。また毎年小学3年生の環境授業でも水害やホタルについて教え、伊良林の児童たちが環境保全の大切さや「いのち」・水害について深く考えていく素地を育てていってほしいと願っています。

夜空を飛ぶホタルの寿命はわずか2週間です。1匹のメスは卵を500個産卵した後亡くなります。1か月後卵から幼虫が孵りますが、ホタル委員は夏休みも交代で学校に出てきて水を替えたりカワニナという餌をあげ飼育していきます。

秋には幼虫の数はだいぶ減ります。12月までに5回脱皮を繰り返し2cmまで大きくなりますが、本会では10月上旬に御手水川に学校の幼虫を放流しお返ししています。小学校では楠など植物の影響が自然発生が難しい状態でしたが3年後校舎が建て替わります。新たに人工川も造成されますのでホタルが自生できるような万全な環境を準備している現状です。ホタルの放遊・飼育を通じて水害で失われた「いのち」に思いを馳せ、自然は牙をむくこともあると知り、自分の身を守る術を考えていくことを伝えていくこの活動を次世代に変わっても続けていってほしいと願っています。



御手水川へホタルの幼虫を放流